

存在だったのです。自分を厳しく鍛錬するという事は、私が日本の友人から学んだことの一つです。

日本は親切と笑顔に満ち溢れた国です。学生寮で落ち着けるよう手助けをしてくれた年配の男性スタッフ、空港で荷物を見つけるのを手伝ってくれた案内所の方、帰国するときに電車の乗り継ぎを教えてくれた日本人の若い女性など、今でも記憶に残っています。日本は外国人を歓迎してくれる国だと度々耳にしますが、今では私もこの意見に大いに賛成です。

(路平さんにも心から感謝の意を表したいです。彼女の通訳や手助けがなければ、私は研究目標をこんなにも

スムーズに達成することはできなかったでしょう。)



日本における口承文芸のデータベース化に関する調査の旅

包 媛 媛
(北京師範大学文學院)



民俗学の研究分野においては、各国ともに自国の口承文芸資料の収集、整理及び保存のために、大量の資金と人力を注ぎ込んでいる。今回、私は幸運なことに神奈川大学非文字資料研究センターへ訪問する機会を得ることとなり、「日本における口承文芸のデータベース化の実践」というテーマを設定した。調査を通じ、日本の口承文芸データベース化作業の近況と研究成果について全面的に理解し、それを踏まえた上で実践においてデータベースのシステムがどのような方法を用いて構築されたのかを明らかにしたい。

本格的な調査に入る前に、まずは小熊誠先生のご指導のもとでインターネットに公開されたデータベースを調べ、日本口承文芸はどのように公開され、どのように運用されているのかを考察した。主に調査したのは、「民俗語彙データベース」、「日本民謡データベース」、「東アジア民話データベース」、「日本昔話資料データベース」(稲田浩二による収集)、「秋田昔話データベース」である。これらから以下のことがわかる。資料の収集であれ、話型の分類であれ、収集地の概況及び語り手に関わるライフストーリーであれ、専門的な民俗学者の主導のもと、日本の口承文芸のデータベース化の成果には、専門化の特徴が強く見られつつも、全体において忠実な記録をなすという原則が一貫して実施されていること、である。

2月12日に、私は譚静さんの協力を得て本格的に調査に入った。まず、国立歴史民俗博物館の小池淳一教授を訪ね、データベースの作成作業とその運用状況について聞き取り調査を行った。さらに民衆の生活と文化に関する展示物を見学した。日本の民俗文化に感銘を受けると同時に、博物館における口承文芸のデータベース化の成果が実体のある資料として結実し、展示が行われていることが見てとれた。翌日、「東アジア民話データベース」を担当する樋口淳先生を訪ねた。樋口先生は2時間ほど

休みなくご紹介くださり、私は日本の口承文芸のデータベース化の実践の歴史と具体的なデータベース操作について全面的に把握することができた。樋口先生が長年にわたって粘り強く基礎を守りながら口承文芸の資料を収集し保存されてきたことに対して心から敬意を表したい。日本民話データベース委員である常光徹先生との交流もまた、収穫に富むものだった。先生は「日本における口承文芸のデータベース化実践の発生は、近代化過程における伝承の場の消失と大きく関わっている」と詳しく解説してくださった。

小熊先生と彦坂綾さんのおかげで、私はついに、口承文芸研究分野において著名な学者である小澤俊夫先生を訪ねることができ、今回の学術的な“聖地巡礼”の願いを叶えることができた。2月19日に、私は小熊先生のご案内のもと、「小澤昔ばなし研究所」を訪問した。小澤先生は85歳のご高齢だが、思考力も記憶力も非常に高いため、インタビューをしていると、思わず先生がどんどん若く見えていくのだった。話型の分類は口承文芸のデータベース化において最も基礎的な作業であるが、キーポイントとなる作業でもある。小澤先生は私に日本



前列左から小熊誠先生、小澤俊夫先生



の話型分類に関わる研究成果について詳しく説明してくださり、その上、関敬吾の話型に基づいて改訂した『日本昔話の型』という著書を下さった。交流の時間は短かったが、私の学術研究は啓発を受け、先生の研究に対する姿勢から多くを学ぶことができた。

三週間の時間はまたたく間に過ぎ去った。味わい足りない気分だったが、「さよなら」を言わなければならない時が来た。訪問中、私の心の琴線に触れたことが数多くあった。小熊先生はご多忙中にもかかわらず、伝統的な日本料理を食べに連れて行ってくださった。彦坂さ

んは事細かに調査のスケジュールを立ててくださった。面談の度に譚静さんには流暢な通訳をしていただいた。そして、非文字資料研究センターの先生方と学生たちはいつも暖かく接してくださった。楽しく収穫に満ちた今回の研究訪問の旅は、私にとって一生忘れられない貴重な経験である。

訪問最後の日の夜明け、私は名残惜しい気持ちと共に宿泊先の国際寮、神奈川大学、白楽駅、横浜港を後にした。またこの美しい国との再会を期待している。

思い出の21日間

咸 瓊 恩
(漢陽大学校)



神奈川大学非文字資料研究センターの支援のおかげで、幸いにも私は神奈川大学が提供する学術交流の機会を得、漢陽大学からの交換研究員として、2015年1月26日から2月15日まで21日間の訪問研究を行った。

21日間という短い間だったが、東京大学、早稲田大学、東洋文庫、神奈川大学など、東京を中心に、日本で古典籍が所蔵されている重要な機関を訪れ、文献一冊一冊に目を通した。

日本の学者たちは、子弟書について詳しい論述を展開しているのみならず、大量の文献の発掘に努め、さらには、多くの子弟書に関する資料を出版している。民間に新しい文体が現れた時代に、西洋の文学観を取り入れた日本の学者たちは、西洋の観念を以て東洋文学を捉えることで、一般民衆の間で流行した戯曲や小説、ロマンス、弾詞(※)などを人文学研究において欠かせないものであると考えた。日本で所蔵されている中国伝来の子弟書の刊行は、比較研究において大変価値のあるものだ。長澤規矩也(1902-1980)と倉石武四郎(1897-1975)の旧蔵は、現在東京大学に収められ、「双紅堂文庫」及び「倉石文庫」となっている。東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵の戯曲の鈔本と曲本の一部は復刻出版され、読者の要望を満たしてくれている。その中には多くの子弟書が含まれており、波多野太郎(1912-2003)によって『子弟書集』に収められ、復刻出版されている。

長澤規矩也は、1932年から1972年の間に6回にわたって中国を訪問し、北京の書店にて各種曲本を大量に購入している。長澤個人が所蔵していた数千冊の戯曲小説は、1950年代に東京大学東洋文化研究所に買い取られ、「双紅堂文庫」が設けられた。さらには、「双紅堂文庫分類目録」が編まれている。

倉石武四郎は、1920年代末、京都帝国大学助教授時代に北京に留学、中国古典籍を大量に購入した。さらに、馬廉らとの親密な交流から俗曲文献の収集にも関心を寄

せた。倉石が亡くなった後、子弟書を含む彼の蔵書は全て東京大学東洋文化研究所に移管され、「倉石文庫」となった。

澤田瑞穂(1913-2003)の旧蔵は、

現在早稲田大学図書館の「風陵文庫」に所蔵されているが、ここにも子弟書のテキストが含まれている。澤田は風陵書屋主人の号を称し、風俗文学の研究家として『宝巻の研究』等の著書を残している。早稲田大学図書館所蔵の子弟書は、主に澤田の旧蔵である「風陵文庫」のものである。

子弟書のテキストが現在まで保存されてきたのは、多くの風俗文学研究者や愛好者のおかげである。彼らの旧蔵は今日ではほとんどが公私立の図書館に移管され、中には散逸してしまったものもあるが、我々は彼らの貢献を決して忘れてはならない。

この21日間は、私にとって、慌ただしくも充実し、収穫のある日々であった。

横浜は美しい景色に囲まれ、神奈川の人々は人情味に溢れていた。

※弾詞 中国明代・清代以降現代まで江蘇・浙江を中心に行われる語り物の一種

